Akita University

文学を教材にした英語の授業
感染と戦争の時代に読む『ヒューマン・コメディ』

秋田大学　畠山 研

本講演では、アメリカの作家ウィリアム・サローヤン（William Saroyan, 1908-1981）の代表作『ヒューマン・コメディ』（*The Human Comedy*）を教材にした英語の授業報告と、今の時代に文学を読むことについて、以下（1）～（5）の順に話した。『ヒューマン・コメディ』は、第二次世界大戦中、家計を助けようと電報を届けるアルバイトをはじめた十四歳の少年の物語である。最近では、物語舞台の架空の町の名「イサカ」（*Ithaca*）をタイトルに 2016 年に映画化もされた（邦題は『涙のメッセンジャー　14 歳の約束』、日本では劇場未公開）。

（1）文学教材の利点

まず、文学を教材にするにあたり、その利点を話した。利点は読む楽しさを与えやすいことである。多くの学生にとって、文学は、高校卒業前までに国語や現代文等で出会っているものの、面白いという実感が得られなかったという声をよく聞く。物語には興味が持てたものの、授業時に「気持ち」や「心情」といった不確かなことを考えさせられたり、テスト時に読むだけで時間のかかる悩ましい選択問題に困ったという声が多い。一方、英語の授業で読む文学作品は、内容を理解し、ストーリーを追う、それのみに集中することができる。単語、表現、文法を正確に理解するには、多くの解説とメモが必要で、結構な時間を消費する。この点で、物語そのものに没頭でき、読む楽しさを削ぐことのない授業が可能になる。

（2）小説の伝えたかったこと？

しかし、物語への没頭を第一とすると、「小説の伝えたかったこと」を考える機会が持てないのではないか？　こんなふうに思われるかもしれない（文学には常に深いテーマがあると思われがちである）。実際の授業では、伝えたかったことは何かという議論には時間を割かず、とにかく英語を読んで正確に理解し、その理解の積み重ねの結果、各場面を想像して楽しむことを優先した。小説に必ず伝えたかったことがあるとは限らないし、それを見つける義務もないし、作品研究をするわけでもないのだから、無理に探さなくてもよいと思われる。小説も、そのほかの多くの娯楽と同じように、細かいところまで正確に理解しながら、好き嫌いも含めて興味を持って楽しめたら十分である。

Akita University

先に話を戻すと、英語で文学を扱うときには、第一に英文の内容理解に費やす時間が多くなるので、教員側は「小説の伝えたかったこと」探しを上手く回避できると言える。

（3）授業中の雑談

ただし、英文の正確な理解を目指して細部まで読むことを前提に、文法解説を多くすると、授業が単調になりがちである。そうしたとき、学生たちの興味関心を引き出す「雑談」が効果的であった。教員は、思ったこと、考えたことを積極的に話すとよい。そうすることで、小さな気づきや細かい発見を何でも自由に発言してよいという雰囲気づくりが可能になる。特に学生たちは文学作品を前に萎縮しがちなので、考えを発信しやすい雰囲気は重要である。

雑談は、①内容理解を助ける、②文化的な知識を増やす、この二つに分けられる。本講演では、①として以下のようなことを紹介した。たとえば、まず物語冒頭で出稼ぎ労働者の黒人が汽車に乗っているが、その人物が向かう目的地はどこか、今いる場所からどれぐらいの距離があるか。その後、主人公のアルバイト先では、ある若者が故郷の母親に金を無心する電報を送るが、当時の１ドルの価値は今でいくらか。また、主人公が初めての仕事で電報を届けたときに客から自家製のサボテンのキャンディーを与えられるが、それはどんなお菓子か。このように、当時の読者ならピンときても今の読者にはわからないことに注意を払い、簡単な調査報告を雑談として話し、内容理解を助けた。

②については、例として、上記の黒人男性が歌う「ケンタッキーの我が家」（‘My Old Kentucky Home’）がどんな歌かを試聴したり、作中で使われていた“two of us”という言い回しからビートルズ（The Beatles）の有名曲‘Two of Us’を流したり、alone という語の前に be 動詞 were があったとき、仮定法の場合のほか、alone は主語が単数だけでなく複数でも使えることを話し、ボズ・スキャグズ（Boz Scaggs）の‘We're All Alone’やそのカバーとともにプロモーションされた洋画を紹介したりした。洋画については、作中で出てきた correct という単語の派生語 correctness の確認のあと、今と昔の映画の異なる点として、最近では「ポリコレ」（political correctness）的な意識により配役が配慮されていることを話し、文化的な知識を養う雑談とした。

（4）感染と戦争の時代に読む

以上の実践報告に加えて、本講演ではこの作品を今の時代にどう読むことができるかという点も話した。『ヒューマン・コメディ』は大戦の悲劇を描く側面があるが、我々もまた、コロナやロシア・ウクライナ問題、すなわち感染と戦争の時代に生き、容易に互いを傷つけ合う世界にいる。そうしたとき、他者を傷つけず冷静でいるにはどうあればよいか。注目すべきは、物語冒頭、故郷へ向かう黒人と主人公の弟が遠くから手を振

Akita University

り合ったところで、そこでは、アフリカ系の黒人と（主人公の一家はアルメニアからの移民なので）アルメニア系、二つの人種の壁が無垢さによって乗り越えられるさまがあり、見知らぬもの同士でも他者理解が難しくない一例が描かれている。この場面は、ユダヤの民を虐殺したヒトラーをはじめ、国や人種間にある他者理解を放棄した大戦に対抗する点で興味深い。黒人の歌う「ケンタッキーの我が家」の歌詞 'Weep no more, my lady' は、さらに、メキシコ系の女性が息子の死を知らされて泣いていた場面と呼応し、アフリカ系からメキシコ系へ、またもう一つの壁も越え、「泣かないで」と慰めの歌を響かせる。そうした歌は、主人公が届ける「涙のメッセージ」、軍からの戦死の知らせ、電報という、事実だけを無味乾燥に伝える形式と対極であることにも気づかされる。本講演を機に、理性的になりすぎた人間たちの情報伝達である短いお悔やみであふれた世界に生身の人間の声（歌）が対抗する、こうした読みかたを紹介し、民間人が戦争に巻き込まれたときに何が大切か、それが『ヒューマン・コメディ』に確かに書き込まれていることを読解した。

（5）教科書選び

最後に、文学の授業で使う教科書選びについて話した。この小説は大学の授業を想定して編集された教科書版があり（松柏社より『William Saroyan's Best Stories: From The Human Comedy/100 倍楽しめるサローヤンの物語』として発売中）、今後も活用が期待される。ただし、この教科書版は、現在多く流通している洋書と異なる点がある。現在ある洋書は作者本人が手直しを加え短くされたもので（近年出た光文社から出た新訳も手直し後の英語の翻訳である）、その一方、教科書版はその手直しが入る前の英文を掲載している。問題は、教科書、洋書、翻訳、どれをあたっても手直しについての断りや説明が欠けていることで、ネットで本を買うことが主流になりつつある昨今にもかかわらず、『ヒューマン・コメディ』はある程度の中身を確認できないと購入が躊躇われる小説であるのが残念である。このように、英語文学は、本選びという第一段階でも未だ不案内かもしれない。我々は、教科書、翻訳、ウェブサイト上のさらなる情報充実を望むべきで、それは、文学作品を読み続けること、授業でも教材にすることで、初めてニーズのあることと認識されるのである。